



現在、主流をなす「山代狂言神楽」を舞い始めたのは、明治の終わりから大正時代に本郷(当時の山代狂言神楽の伝承元)より習ってきたといわれている。

近年、釜ヶ原の神楽が一番盛んであったのは第2次世界大戦(昭和16年)以前である。地元で柔道を習っていた若者が神楽も熱心に舞い、その荒い舞が近郷の人々の好評を呼んでいたといわれる。

終戦後、神仏軽視の風潮の中で舞が少なくなったが、釜ヶ原の若者は戦後すぐに衣装や面などを揃え再興した。しかし、昭和26年のルース台風により衣装の殆どを流出、損失し、以来神楽の音が消えた。

昭和40年頃、長老の山崎藤吉氏(当時80歳)などの数人の古い神楽仲間が健在であったとき、青年・壮年10数人を集めて神楽保存会を作り、村おこしを始めた。それまで神楽は持ち株組織で誰でも舞うことができなかったが、当時の保存会の者は釜ヶ原と大三郎の全戸に呼びかけて誰でも舞子になれる制度にした。

また、大三郎には昔から別の伝統ある「太夫舞(神舞)」があった。しかし、終戦後次第に消失し、舞は影をひそめ、奏楽のみが残っていた。これらも神楽保存会に持ち込み、釜ヶ原神楽を中心に現在の神楽に伝承してきた。

釜ヶ原神楽団

